

博士論文要旨

氏名	奥本 京子
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	乙第4号
学位授与年月日	平成23年3月17日
学位授与の条件	神戸女学院大学学位規程第5条2項の規定による
学位論文題目	平和ワークにおける芸術アプローチの可能性：ヨハン・ガルトゥングによる朗読劇 <i>Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica</i> （『ホーポノポノ「アジア・太平洋の平和』』）からの考察

論文の要旨

芸術は平和創造に何らかの貢献ができるのだろうかというのが、本論文の探究の出発点である。そして、その平和創造という目標を達成するための領域を「平和ワーク」と呼び、特に平和学の視点から、主流の国際政治における安全保障の論理を批判・相対化しつつ、それをトランセンド（超越）し、新しい発想による課題への取り組みが求められている。

既に、世界的に見ても、紛争地域・平和構築の現場において、芸術アプローチが様々な形で試みられている。しかし、それらを記録・分析し、理論化する試みは多くはない。分析対象が個々の状況に依存し複雑であることが、理論化を阻む最大の要因であろう。こうした現況を乗り越えるため、分析ツールとしての平和学の諸概念を最大限に利用する。「平和ワーク」の概念が豊富で実質的な意味を持つためには、どこまでも非暴力的で平和的なプロセスを開発していかねばならないからである。

本論文では、最初に、「平和ワーク」が指し示す範疇を明確化する。そこでは、市民社会・NGOによる非暴力介入の意義が明瞭になる。また、平和ワークにおける芸術アプローチの有効性を検討するに際し、芸術の種々のあり方の分析に、直接的・構造的・文化的暴力／直接的・構造的・文化的平和、及び紛争転換という平和学の諸概念を実際に適用する。具体的には、平和・暴力との関係における芸術のあり方を、「暴力を助長する芸術」と「平和を創出する芸術」とに分類する。さらに、後者の意味をより深く把握するために、「紛争を顕現する芸術」の概念を提案する。また、その具体例として、ガルトゥングによる英語朗読劇 *Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica* を取り上げ、その内容と形態を詳細に分析する。

また、芸術と平和を繋ぐ諸要素として、芸術の平和利用に際しての「平和的感性」と「批判的精神」、芸術の「表現性」と「伝達性」、そして平和ワークにおける「創造性」と「対話」について論じる。これらの諸要素が総て生きて働くことによって、紛争を顕現する芸術アプローチが、

平和ワークとして十全に機能するのである。そして、平和ワークの主体である「平和ワーカー」は、芸術アプローチにおいて「市民芸術家」としての資質を獲得するのである。

以上の考察の後、東アジアの紛争に対する平和ワークとして、朗読劇 *Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica* を実際に活用することを検討する。まず、この朗読劇テキストに描写される紛争の内容の諸要素——主体のある行為と主体なき行為、アポロジのあり方、多様な「声」の表象と代弁、加害と被害の二元論——を検討し、東アジアの紛争に表出する問題を明確化する。次に、「朗読劇」という形態の諸特徴——紛争理解の深化、参加型主体の形成、平和的価値の創造——を検討することで、朗読劇という芸術形態による平和ワークのあり方を分析する。

とりわけ、芸術アプローチにおける平和的価値の創造は、平和ワークの中心的課題であるため、それが成り立つ諸要件——抽出性・虚構性・真実性・創造性——について考察する。しかし、そうして提示された「もう一つの未来」は、あくまで理論的なものである。より真実に近づくための「現実性」は、理論化の過程において捨象した多種多様な「声」に再び耳を傾けることをわれわれに要請する。このように、平和ワークとは、終わりなき循環のプロセスなのである。こうした平和ワークの全過程において、核となるのは一貫してテキストに対する信頼性であり、その意味でテキストを「玩味」することが、平和ワークの持続性を保証するのである。こうして、安全保障アプローチに代わる平和アプローチの言説が生み出される。

平和ワークの目標地点は、市民芸術家としての平和ワーカーが、平和的価値創造を実践することである。それは終わりなき過程であるに相違ない。そして、平和ワークにおいては過程そのものが重要であることもまた事実である。平和ワークそれ自体が平和的価値を担うのである。すなわち、平和ワークは単に平和に到達するための手段ではなく、平和そのものなのである。

国際政治において安全保障アプローチが主流となっている現在、政治家や外交官のみに平和・紛争の問題を委ねることなく、市民一人ひとりが、非暴力介入による平和ワークを実行するよりほかに、真の平和への道はないであろう。そして、そうした平和ワークの中で芸術の果たすことのできる役割とは、平和ワーカーが、市民芸術家としての資質を开花させることである。本論文は、このことを、朗読劇という芸術の一ジャンルを素材に論じたものである。

ABSTRACT

The Arts-based Approach in Peace Work:
Analysis of Johan Galtung's Readers' Theatre,
Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica

This dissertation stemmed from an exploration of the question: Can the arts contribute to peace creation? In order to achieve the goals of peace creation, "peace work" demands a new perspective, which is based on current Peace Studies, but which criticizes and relativises the theory of international security in mainstream political science. It challenges and transcends some basic concepts by presenting new agendas with new conceptual work.

For peacebuilding out in the field, diverse arts-based approaches have already been experimented with in conflict zones worldwide. However, there is very little research which has attempted to record, analyse and theorise such practical experiments. The primary reason preventing researchers of Peace and Conflict Studies from developing new theories is due to the specific and complex circumstances of each target case. To rectify this, the current study utilises the basic concepts and analytical tools of Peace Studies to the fullest. In order to realise the rich and substantial meanings of "peace work," a process which is as nonviolent and as peaceful as possible needs to be developed.

First, the area that the concept of "peace work" covers is clarified, and the meaning of nonviolent intervention by civil society and NGOs is illustrated. In order to examine the effectiveness of the arts-based approach in peace work, some forms of art are investigated utilising Peace Studies concepts such as direct, structural and cultural violence, direct, structural and cultural peace and conflict transformation. In fact, the art forms in relation to peace and violence can be classified into two groups: "art that promotes violence" and "art that creates peace." One art form from the latter group, "art that reveals and highlights conflict," is examined more deeply. A specific example, the drama text, *Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica*, authored by Johan Galtung, is analysed focusing on its contents and its form.

Essential elements of art used for peace are: (a) "peaceful spirit" and "critical mind," (b) expressiveness of art and communicativeness of art, and (c) creativity and dialogue in peace work. When all these elements work together organically, the arts-based approach reveals and highlights conflict, functioning fully and successfully as peace work. The actors, "peace workers," then become "citizen artists."

The drama text, *Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica*, is situated in East Asia and its practical application as peace work is examined. First, the contents of the text are explored to clarify the root of the conflict. This means examining such elements as: (a) the act of commission and the act of omission, (b) forms

and meanings of apology, (c) representation of various “voices,” and (d) the dualistic ideas dividing victims and perpetrators. Second, the functions of text form are analysed to assess whether this text as “readers’ theatre” is an appropriate art form which can be used in peace work. The functions include (a) enlarging the understanding of the conflict, (b) encouraging participants to become actors, and (c) enhancing the value of peace.

Creating the value of peace in the arts-based approach is a key issue for peace work. Concepts such as abstraction, fictitiousness, truthfulness and creativity are the basis of achieving this creation of the value of peace. However, “another future” suggested by such arts-based peace work is only a theoretical ideal. In order to get closer to truth, “reality” is required. Reality forces us to listen again to all the “voices” that had once been rejected in the process of theorising. In this way, peace work is a circular process that never ends. In the midst of the whole peace work process, the core of the work is the constant trust in the text itself, and “appreciation” of the text which will guarantee the sustainability of peace work. This is how the new discourse of the peace approach is produced, instead of the traditional security approach.

The goal of peace work is to have peace workers as citizen artists practice their creation of the value of peace. This is always an unfinished process. Furthermore, it should be emphasised that the process itself is the most essential. In this process peace work carries with it peaceful value. In other words, peace work is not only a means to achieve peace, but also *is* peace.

Currently, the security approach is part of the mainstream discourse in international politics. Nevertheless, each one of us, all citizens, needs to practice peace work by nonviolent intervention, without relying exclusively on politicians and diplomats concerning matters of peace and conflict. While politicians and diplomats play an important role, it is also necessary to shift the perspective to members of the civil society. Integrating the arts in peace work allows peace workers to flourish as citizen artists, and “readers’ theatre” is a powerful means to do just that.

博士論文審査結果の要旨

提出された論文は、基本的には平和学という学術分野に属する主題であるが、平和創造において芸術がどのように寄与できるかを問題として論究されている。したがって、関連分野としては芸術学（個別に演劇論を含む）、国際関係論、異文化交流における言説・言語論、等々に及んでおり、本学大学院文学研究科としては英文学専攻のみならず総合的な審査が求められるところであった。口頭試問審査は、2011年2月2日(水)午前10時30分より実施され、まず提出者より論文概要の報告がされ、その後、審査委員三名によりコメント及び質問がなされた。

論文は論旨に即して整理し直すと三部に分かれる。第一部では、平和ワークのための芸術アプローチの前提要素が論じられる。本人が評価し私淑するガルトウングの平和思想の概要が整理されるが、関連概念および論理体系の祖述は適切であり、戦争対平和という二項対立ではなく暴力対平和という対比の必要性が論じられる。そして平和学が定立される枠組みが提起される。第二部では、平和ワークにおいて、紛争の際の非暴力介入の有効な方法として芸術を使うアプローチの論理的要請が論究される。紛争における加害者と被害者との二元対立を止揚するものとしての朗読劇という芸術の効用に注目する。第三部は、ガルトウングによる英語朗読劇 *Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica* を実例に、アジアにおける平和創造のプロセスの可能性が主題である。その実際の上演が紛争現場にフィードバックされることを確認し、朗読劇を介して理論（平和学・紛争転換論）と実践（平和ワーク）との結合が提示される。また、平和ワークの主体（「平和ワーカー」）は芸術アプローチによって、平和ワーカーと芸術家というふたつの行動を担う「市民芸術家」という新たな資質を身につける、と論じられる。とくにアジアにおいて日本が戦争によってもたらした他国の市民との不和をどのように和解へと至らしめるかに関しても、朗読劇の実践例に基づいてその可能性に論及している。

以上のような論旨で展開される論文に関して、論文の構成、基本概念の明確化、趣旨展開の論理的周到性、等々の点に鑑み、審査委員の三名は一致して合格と判断した。

また、口頭試問において、審査委員からは、まず論者が平和研究者・教育者・実践活動家として国内外で多大な活躍と貢献をしていることを承知かつ評価した上で、論文審査にあたった旨が伝えられた。さらに、平和学の主導は欧米の思想に拠ることが多い点を非欧米圏の研究者としてどう評価すべきか、英語テキストを使うことによる言語帝国主義的な問題は意図されない暴力とも言うべきであろうが、それはどのように克服されるべきか、といったコメントと質問がなされた。芸術学的視点からは、芸術作品には必ず作者の意図とその享受者による理解というズレが生じるのが常であるが、平和ワークにおいて芸術の効用を重視する論者の立場からは、そうした芸術解釈学的な問題をどう捉えるべきか、あるいはまた、芸術を手段化することで芸術作品の持つ本来的深さを限定して浅薄な芸術概念に陥ることにならないか、といったコメントと質問もなされた。

総じて、提出者による論文概要の報告も用意した配付資料に沿って論点を簡潔に整理して説得力に富み、またその後の質疑応答についても、今後の研究・考察課題はそれとして、ほぼ過不足ない適切な応答が得られた。この点においても、審査委員三名は合格判定に異論はなかった。以上により、本審査委員会は、本論文を本学の博士（文学）学位論文としての条件を満たしているものとして合格と判定する。

2011年2月18日

主査 濱下 昌宏

副査 立石 浩一

副査 安斎 育郎

立命館大学特命・名誉教授

立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長